

アメリカイキリス其外
 異国向陶器座其方江
 被仰付候条、為冥加正銀
 五百目、毎歳堅可相納者也

萬延元年
 申十二月
 坂部又右衛門

有田皿山本幸平山
 田代紋左衛門

有田町歴史民俗資料館には町内に所蔵されていた古文書が数多く寄贈、あるいは寄託されています。上記の古文書は万延元年（1860）皿山代官・坂部又右衛門より本幸平山・田代紋左衛門へ下された文書です。内容は次のとおりです。

アメリカ、イギリス其外
 異国向陶器座其方江
 被仰付候条、為冥加正銀
 五百目、毎歳堅可相納者也

万延元年 申十二月 坂部又右衛門（花押）
 有田皿山本幸平山
 田代紋左衛門

これは冥加銀（みょうがぎん・藩への上納金）を納めることで、それまで久富与次兵衛にのみ許されていた海外貿易に田代紋左衛門も加わるようになったとき、当時の皿山代官から下された許可書です。明治へ移るまでこの二人が貿易の仕事に従事しています。

このほか、田代家文書としては登り窯の沽券状（こけんじょう・権利書）や、家屋や畠の沽券状、手形覚、手紙類、有田郷上皿山見取り図など総数 699 点が寄託されています。これらの史料からは、幕末から明治にかけての有田皿山の様子が克明に浮かびあがってきます。

有田町歴史民俗資料館

皿山びとの歌 No.2

ひな祭り

この季節の年中行事としては、「おなご」の節句、ひな祭りがあります。有田では桃の花が咲き誇る四月三日に行なうのが普通です。

旧暦三月といえばそろそろ春風がふき、花も散りかかるところで、疫病がはやりだす季節でもありました。

農耕が中心であった時代、この季節に農耕儀礼に関連した祭りがあり、そのための物忌みの行事の一つとして、身についた“けがれ”を落とす必要があったといわれています。厄払いや“けがれ”を落とすために、人形を草や紙、布などでこしらえ、そのヒトガタを川に流したり、捨てたりすることで災難や悪病からのがれようとした。現在でも鳥取県や和歌山県などで流しびなの風習が残っている地区があります。

このような質素なもので作られた人形、ヒトガタは節句がすむと残しておかず、川に流したり捨てたりしますが、技術の進歩や、暮らしが豊かになるにつけ立派なヒトガタになってきました。そうすると毎年捨てずに保存しておくようになり、現在のような人形のおひなさまの祭



りになっていったものと思われます。

有田での「おなご」の節句は、五月の端午の節句ほど盛んではありません。これは昔の男尊女卑の風潮の名残りでしょうか。でも子供の成長を願う親心は男の子でも女の子でも変わりはありません。年に一度、しまっておいたひな人形を飾り、よもぎ餅（有田ではフツモチといいます）をつき、白酒を飲んで女の子の成長を祝います。また、この日は「節句タニシ」といって「タニシ」をしらあえ（有田では“およし”といいます）にして食べます。

よもぎ餅は嫁の実家や近所に、桃の花を添えて配りました。酒は桃の花びらを浮かべたり、燗びんに桃の小枝をさしたりしてその酒を飲みました。優しさあふれる春の行事の一つです。



よもぎ餅 フツ餅

今回は春の匂いが感じられるよもぎ餅、この地方でいうフツ餅の作り方をご紹介します。今では買って食べることが多くなりましたが、少し前までは、ソーケ（取っ手のないかご）を片手に田んぼのまわりや、道際に生えるよもぎ、フツを摘んで各家庭で作っていました。

材料 (40個分)

- | | |
|---------------|---------|
| ・よもぎの葉 | ソーケいっぱい |
| ・重曹 | 小さじ1 ぱい |
| ・餅米 | 1 升 |
| ・あずきあん | 適量 |
| ・餅とり粉 あるいは黄な粉 | 適量 |

作り方

- ① 摘んで来たよもぎをよく洗い、水気をきって葉を一枚一枚バラバラにします。

- ② 沸騰したお湯の中に、よもぎの葉と重曹を入れて、茎の方が柔らかくなるまで煮ます。
- ③ 柔らかくなったよもぎの葉を2～3時間水にさらします。
- ④ よくしぼって水気をきってから、すり鉢でよくすります。あと、よくほぐしておきます。
- ⑤ 餅をつきます。その間にほぐしておいたよもぎの葉を2～3分蒸してあたためます。蒸しすぎると色が悪くなるので注意。
- ⑥ 餅がよくつけたところで、あたためたよもぎの葉を入れてさらによくつきます。このとき、葉と餅の温度がちがうと後で腐りやすいので注意。また、このとき餅とよもぎをよくまぜ合わせる作業がひと苦労です。
- ⑦ このあと、あんを入れて丸めます。餅とり粉のほかに黄な粉を使ってもよいです。

(ご協力・百田カクさん)

発掘レポート

小溝中窯 小溝下窯



今回は昨年行なった町内古窯跡群詳細分布調査4ヵ所の中から、小溝中・下窯の2ヵ所を取り上げてみました。

小溝窯跡群は西部地区の産業道路沿いにある家永齒科裏手の丘陵に位置しています。2つのため池を挟んだ3つの丘陵上に西から上・中・下の窯場跡が並んでおり、各丘陵上からは西部地区が一望できます。小溝窯は磁器を最初に作ったと伝えられている李参平や家永壺岐守が関係していたといわれ、有田の初期の窯業を考える上で重要な窯です。

このうち上窯は昭和61年度に九州陶磁文化館で調査を行ない、慶長（1596～1614）から寛永14年（1637）ごろの2基の連房式登り窯が確認されています。連房式登り窯とは今の窯のように焼成室が1つではなく、10数室から20数室連ねた大規模なもので、焼成室ごとに所有者が異なっていました。



小溝中窯

中窯は下の方の焼成室がため池などによって壊され10室ほど残っていました。1つの焼成室は幅2,6m、奥行き2,4mほどと小さく、江戸時代初期の窯であることがわかります。ちなみに江戸時代末期の窯では幅7~8m、奥行き5mほども

あり、全長100㎢を越える窯もありました。中窯からは陶器と磁器が約2000点出土しましたが、その9割は陶器でした。皿が最も多く、碗、小杯、片口鉢、壺・甕（かめ）、火入れなどがありました。皿は陶器、磁器ともに「砂目積（すなめづみ）」と呼ばれている方法で、同じ形の製品を10枚前後重ねて焼いていました。

砂目積とは団子状にした直径 1cm ほどの砂を上重ねる皿の高台幅に合わせて内底面に 4ヵ所ほど置いたもので、上下の皿がくっつかないようにするための窯積み方法でした。この砂目積は陶器では一般的ですが、磁器ではあまり見られません。朝鮮半島の磁器にこの砂目積があることから、朝鮮半島の技術が伝わって、有田で磁器が焼かれ始めた最初のころだけに行なわれたと考えられます。このことから、中窯は 1620 年前後の窯ではないかと推定されます。



小溝下窯

下窯も下の方がため池で壊され7室しか残っていませんでした。焼成室の幅は2,8m、奥行き2,5mほどで、残っていた側壁の傾きから天井までの高さは1mほどしかなかったと推定されます。下窯からは約4000点の陶磁器が出土しましたが9割は磁器でした。碗、皿、瓶・壺が多く、片口鉢、すり鉢、鉢、火入れなどがありました。磁器では染付の製品がほとんどでしたが、白磁やルリ釉の製品もありました。出土遺物から慶長の終わりごろから寛永14年ごろに操業した窯ではないかと考えられます。

*** 速報! ***

有田町教育委員会では 4 月に入ってから、赤
絵町にある有田郵便局の新築工事に伴う埋蔵文
化財の確認のため、発掘調査を行ないます。こ
の地区は安政 6 年（1859）の有田郷絵図に家屋
が建ち並んで描かれており、江戸時代末期の家
屋の様子を知るための調査です。地下足袋姿の
職員を見かけたら、気軽に調査の内容をお尋ね
ください。



さいれいびょう

祭礼廟

稗古場地区の観音山にはさまざまな石祠があります。その中で小さいながらもちょっと目を引く石祠が「祭礼廟」です。

だいぶ摩耗して文字がわかりにくいのですが、表面に「祭礼廟」、その下方の左右にそれぞれ「金ヶ江氏」、「深海氏」と刻んであります。金ヶ江氏も深海氏も、ともに朝鮮半島から渡来し日本に帰化した陶工で、有田の磁器の創成に深く関わっているといわれています。

以前はこの観音山で「山登り」といって職工の慰労と先祖崇拝のための行事が行なわれていました。江戸時代、延享3年(1746)から天和2年(1831)の間の出来事が記されている『皿山代官田記覚書』に、文化4年(1807)の申達帳があります。その中に

「この春以来、山登りといつてあちこちへ遊びまわっていると聞いているが、細工人たちの日ごろの不満はもっともである。しかし、そういうことは家業を怠ることになるのでよくない。これからはそういうことはやめ、仕事に精を出すよう十分に申し聞かせるよう」という一文があり、仕事を怠けることを理由に山登りを禁止しています。しかしこれといつて娯楽のなかった時代には、酒を片手にちょっと見晴らしのよい所へでかけ、気のあった仲間と過ごすひとは何よりの息抜きだったことと思われます。

これからの季節、散策にはもってこいの気候となります。あなたも山登りしてみませんか。



資料に寄贈者名

昭和62年10月～

- 有田町 西野 勇氏 -----ちきり2点
- 有田町 橋口 詮氏 -----土型・陶片9点
- 有田町 徳久文八氏 -----ちきり1点

ありがとうございました。

印刷物紹介

- ◆天狗谷古窯跡 ----- 定価5,000円
- ◆山辺田古窯址群調査報告書 ----- 定価5,000円
- ◆長吉谷窯跡 ----- 定価1,500円
- ◆小樽2号窯跡 ----- 定価1,500円
- ◆有田町史

(既刊分) 陶業編Ⅰ、Ⅱ

政治・社会編Ⅰ、Ⅱ

通史編、陶芸編、商業編Ⅰ、

全巻予約定価3,000円

分冊 定価3,500円

別編 有田皿山の方言定価1,000円

以上の書籍を取り扱っていますので、ご希望のかたは民俗資料館にてお求めください。

濃み筆のつぶやき

四月に入ると白磁ヶ丘は一気に春。桜並木は勝ち誇ったようにピンク一色となります。でも意外と知られていないのは、散った後の花びらの掃除。散り始めのころはピンクの絨毯(じゅうたん)をしきつめたようで、それはそれは美しいのですが、一度雨にうたれてしまうとどうダメです。でも、桜の花を見てこういうイメージが浮かぶのは、ちょっと風情がありませんね。

有田の町には、ほかにも桜の名所はあちこちにありますが、ここ白磁ヶ丘のが一番(あくまで主観です)と思っています。ぜひ、一度ご見物なさいませんか。(葉)

有田町歴史民俗資料館報 皿山びとの歌 No.2

発行年月日 * 昭和62年12月28日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955・43・2678